

『釈浄土群疑論』における阿弥陀仏の仏身仏土

村 上 真 瑞

懷感は『釈浄土群疑論』において阿弥陀仏の仏身仏土はどのように考るべきかを、次のように論じてゐる。「問曰今此西方極樂世界三種土中是何土授。釈曰此有三釈。一是他受用土。以佛身高六十万億那由他恒河沙由旬。其中多有二一生補處。无有三衆苦但受三諸樂等上故。唯是於他受用土。二言唯是變化土。有下何聖教言中佛身高六十万億那由他恒河沙由旬等。即証是於他受用身土。何妨三淨土變化之身高六十万億那由他恒河沙由旬。」と以觀經等皆說為凡夫衆生往生淨土。故知是變化土。三通二二十一地前見三變化土。地上見三他受用土。同其一處。各隨三自心所見各異。故通三二土。由此經言是阿弥陀仏非凡夫境。當作大六觀也。」と説かれるように、極樂淨土について三釈を示してゐる。一つには『觀無量壽經』を引いて、仏身の高さが六十万億那由他恒河沙由旬あり、その中に一生補處の者がいると説き、また衆苦がなく、ただ諸樂のみを受けると説くことからして、他受用土であるという解釈である。二つには、仏身の高さが六十万億那由他恒河沙由旬であるから他受用土であるとせね

ばならないという經証が別にある訳ではないから、『觀無量壽經』に凡夫往生が説かれていることからして、變化土であるという解釈である。三つには、地前は變化土を見、地上は他受用土を見ると釈する。つまり、同一の場所を見るのであるが、各々その心に随つて所見が異なるので、他受用土、變化土の二土に通ずると解釈するのである。以上三釈を示していられるが、懷感はどの解釈を本意としているのか考へてみよう。『釈浄土群疑論』によると、「問曰。前第一釈若是他受用土者云何地前凡夫生若變化土者云何地上聖人生。釈曰。計彼地前菩薩聲聞凡夫未証三遍滿真如。未斷三法。二執識心麤劣。所變淨土不可同於地上諸大菩薩微細智心所變微妙受用淨土。然以阿弥陀仏殊勝願增上緣力令下彼地前諸小行菩薩等識心雖劣依三託如來本願勝力還能同彼地上菩薩所變淨土微妙廣大清淨莊嚴亦得見故名生他受用土。」と説かれるよう、地前の菩薩や声聞、凡夫等は、最高の真如をさとっていないし、人法二執を断じていないから、識心が劣つていて、その識心の所變

である淨土もまた、地上の諸大菩薩の微妙なる智心所変の微妙なる受用土には及ばないものであるが、阿弥陀仏の殊勝なる本願増上縁の力を用いることにより、その地前の諸小行の菩薩等をして、その識心が劣つてゐるのにもかかわらず、如來の本願のすぐれた力にすべてをまかせてしまえば、地上の菩薩所変の淨土と同一の微妙広大なる清淨莊嚴を得さしめられるとして示されている。すなわち、いかに識心の劣つた凡夫であつても、阿弥陀如來の本願他力によつてこそ、地上の菩薩に等しい他受用土に生ずることができるとして、他受用土説を力説している。以下『釈淨土群疑論』では、論述のほとんどのスペースを費して、他受用土について説いてゐる。他の説については、最後の数行につけ加えられてゐるにすぎない。すなわち、「言_ニ變化_ニ土地上_ニ菩薩生_ニ者此有_ニ現_ニ一身_ニ理通_ニ報化_ニ。隨_ニ宜_ニ見_ニ者凡_ニ聖_ニ各_ニ別_ニ何妨_ニ下_ニ不得_ニ生_ニ上_ニ受_ニ用_ニ土_ニ以_ニ下_ニ不_ニ能_ニ見_ニ勝妙之土_ニ。又業劣弱_ニ不_ニ得_ニ往_ニ生_ニ上_ニ能_ニ見_ニ下_ニ為_ニ欲_ニ接_ニ引_ニ。地前凡夫_ニ一生_ニ變化土_ニ有_ニ何妨_ニ。又地上_ニ菩薩生_ニ變化土_ニ者皆是化身_ニ亦无_ニ有_ニ過_ニ。」と説かれるように、地上の菩薩が變化土に生ずることは、もともと地上の菩薩は、報化二土に通じて身を現すことができるのであるが、機根の低い凡夫にとつて、すぐれた仏國土を見ることができないから受用土に生ずることは難しく、業もまた劣弱であるから往生することができない。したがつて、そのような下根の凡夫を接引せんがた

めに、すなわち還相廻向のために地上の菩薩が變化土に生ずるのであると示されている。ここで注意せねばならないことは、今述べたような下根の、往生できない凡夫であるからこそ、阿弥陀仏の弘誓願力の増上縁によつてのみ、その他受用土に往生せしめられるのである。それにもかかわらず、阿弥陀如來の弘誓願力について、この部分においては一切ふれず、凡夫の機根の劣つてゐることだけを述べている。したがつて、もし阿弥陀仏を信じない凡夫にとつての淨土を考えるのであればこれで正しいといえる。しかし、今は、阿弥陀仏の仏身仏土が最も主要な問題となつてゐるのであるから、この論述は、論点からはなれたものであるといわざるを得ない。また、この論述では菩薩の還相廻向について述べているが、このことも同様に本来阿弥陀仏の仏身仏土を論すべき主旨からはなれた問題である。したがつて懷感は、ここにおいて弘誓願力の作用を考えない立場、すなわち法相的立場から凡夫の淨土を考えたのであるといえよう。しかしこの立場は阿弥陀仏の仏身仏土とは別の問題であり、懷感が法相に対して一応法相の立場を理解していることを知らしめんがためにつけ加えたものと考えることができる。したがつて懷感が展開した阿弥陀仏の仏身仏土論の本意は、他受用身、他受用土にあつたということができよう。その傍証として淨土の三界摸不摸の問題をとりあげてみよう。すでに拙稿において論じ

たように、この問題は、無漏なる如來の淨土へ有漏なる凡夫が往生するという相互に矛盾した者が同一の場所に往生するから発起する。その矛盾を懷感は次のように解決をはかる。すなわち、「託^{スルヲキサ}如來^ハ無漏淨土^ハ雖^ハ以^ハ三有漏心^ハ現^シ其淨土^上而^ハ此淨土^從本性相土^ト土亦非^ハ縁縛相應縛^ハ不^レ增^ハ煩惱^ハ如^ハ下有漏心縁^ハ滅道^ハ滅^ハ煩惱^ハ不^レ増^ハ猶^シ如^ハ下觀^ハ日輪^ト損^ハ減^ハ眼根^上也。故^ニ三界^ハ非^ハ三界^ハ繫^ハ煩惱^ハ增^ハ也。」と指摘するように、太陽を如來無漏の淨土にたとえ、眼根を煩惱の繫縛にたとえていると言えよう。つまり如來無漏の淨土を凝視することによって、かえつて凝視するという執著がそこなわれ、煩惱の繫縛から放たれると言うのである。したがつてこの問題は凡夫と如來無漏の淨土との関係であり、如來無漏の土に具わる力用には、凡夫所變の有漏土に作用することによって凡夫所變の有漏土を清淨化するという増上縁的な作用を見出すことができる。したがつて、たとい凡夫所變の土が有漏であつても阿弥陀如來の弘誓願力の増上縁によつて往生せしめられるのであるから三界不攝である。その立場から考へるならば、變化土は『成唯識論』卷第十⁽⁶⁾によると、未^シ登^シ地^の有^シ情^の所^シ宜^シに随^シつて仏土を化^シ爲^シし、その土は淨穢大小に通じ、さらに前後改転するとも説かれて^シいる。したがつて未^シ登^シ地^の衆生の識心は三界不攝であり、その所變もまた三界不攝であるから、未^シ登^シ地^の有^シ情^の所^シ宜^シにしたがつて化^シ爲^シされた變化土もまた三界不攝のものと言^うこ

とができる。よつて、阿弥陀如來の弘誓願力によつて凡夫が往生させられる三界不攝の土は、他受用身・土であり、變化土と言^うことはできない。これが懷感の本意であり、前述の三説の中他の二説は法相の立場を意識して、つけ加えたものと言^うざるを得ない。その証拠として、『釈淨土群疑論』卷第四によると、「都率天主跡^{ハトセリ}現^シ凡夫^ト雖^シ名^ハ補^ト未^シ成^ハ妙覺^ト縱^シ當^シ成道^{スレドキ}只^シ現^シ化^シ身^ト阿弥陀仏^ハ已^シ成^ハ正覺^ト居^シ處^シ淨土^ト多^シ現^シ受用身^ト」と説かれるように、都率天主は化身であり阿弥陀仏は受用身であると示されている。次に專修と雜修との問題を論ずる中において報、化の淨土の問題を述べている。『釈淨土群疑論』卷第四によると、「問曰。菩薩處胎經^{カク}第二卷説^ト。西方去^ハ三此闍浮提^ト十二億那由陀^ト有^シ解慢國^ト。其土快樂^ト作^シ俱伎樂^ト。衣被服飾^ト香華莊嚴^ト。七寶転闊牀^ト。擎^シ目^ト東視^シ宝牀隨^シ転^シ北視^シ西視^シ南視^シ亦如^シ是轉^シ。前後發意衆生欲^シ生^シ阿弥陀仏國^ト者而皆染著解慢國^ト。不能^シ前進^シ生^シ阿弥陀國^ト。億千萬衆^ト時有^シ二人^ト生^シ阿弥陀仏國^ト。以^シ此經^ト准^シ難^シ可^レ得^シ生^シ。何因^シ今勸^シ生^シ彼^シ仏國^ト也。」と説かれるよう

に、「菩薩處胎經」を引いて、西方阿弥陀仏國に往生したいと願う人であつても、ここから十二億那由陀にある解慢國に染著して、進んで阿弥陀仏の國に往生したいと思う者がなくなつてしまふ。その数や億千万人の中に一人しか阿弥陀仏の國に往生できない、と示される。その理由は次のように説明されている。『釈淨土群疑論』卷第四によると、「釈曰。只由^シ

此經有斯言教故。善導禪師勸諸四衆、專修西方淨土業者、四修靡墜。三業無雜廢。余一切諸願諸行、唯願唯行。西方一行。雜修之者、万不一。生。專修之人、千无一失。即此經下文言。何以故。皆由解慢執心不牢固。是知雜修之者、為執心不牢之人。故生解慢國也。正與三處胎經文相当。若不雜修。專行此業。此即執心牢固。定生極樂國也。」と説かれるように、善導が四修を『往生礼讚』に修行方法として示しているところを引いて、西方淨土の修行をする者は、西方淨土と関係のない他のあらゆる願や行を捨て去り、身と口と意との三つの行為に他の願・行を混入させることなく、たゞ西方の一行だけを願い、行ずるべきである。西方以外の行を混ぜ修した者は万の中に一人も往生できないが、専ら西方の行だけを修した人は千の中に一人ももれることなく往生することができるという。その理由として、行をおこたり、西方に心を執することが固くないからであるとして、西方以外の行である雜行を修する者は、西方に心を執することが固くないので解慢國に生ずるとして、菩薩處胎經の文と一致することを述べてある。したがつて、西方以外の雜行を修せず、専ら西方の行を修する者こそが、西方に心を執する事が固いから、極樂淨土に往生することができるとしている。したがつて、この文のあとで懷感が、「雜其行、墮於解慢之邦、專其業、生於安樂之國。斯乃更顯淨門專行而得往生。豈是彼國難往而无生。曷哉學徒不可」

不レ專ニ其道也。又報淨土生者極少。淨土中生者不レ少。故經別説、實不相違也。」と説くところの化の淨土というのが解慢國であり、報の淨土というのが西方極樂世界であることが理解される。したがつて、ここで極樂に生まれる者は極て少く、解慢國に生まれる者は少くない、とするのは、前に、行を西方だけに定めて専らに修行すれば、決して往生することは難しいことではない、と述べていることから考えるならば、この最後につけ加えられた一文は、難行を修する者に対する戒めであると理解すべきであろう。よつて、この問答においては、西方極樂世界を報土と理解しているという証拠となることには注目せねばならない。以上、阿弥陀仏の仏身仏土は受用身受用土又は報身報土であるという証拠があげられることからするならば、懷感は建前として前述の三説を示しているが、その本意は他受用身他受用土こそが阿弥陀仏の仏身仏土であるとしていたことが理解されるのである。

1 『淨全』六卷六頁a—b 2 同右 六卷六頁b 3 同右

六卷八頁a—b 4 拙稿『釈淨土群疑論』に説かれる淨土について(『印仏研』32—1) 5 『淨全』六卷一〇頁b 6 『大正藏經』三一卷五八頁c 7 『淨全』六卷五四頁b 8 同右 六卷四九頁b 9 同右六卷四九頁b 10 同右 六卷五〇頁a

(知恩院淨土宗學研究所研究助手)